

飯尾和也

小野伸二、高原、遠藤——
“黄金世代”の代表から、
21歳でクビになった男。



Iio kazuya

飛び級で輝き、どん底を味わった闘将・飯尾和也。
彼がプロ16年の誇りを胸に、
株式会社メーカーズ（ケイカフェ）で仕掛ける
「福岡スポーツのワクワクする未来」

対談

『VAMOS』企画パートナー／元プロサッカー選手

衛藤裕

Eto yu

1983年10月17日生、福岡県出身。サガン鳥栖、徳島ヴォルティス、カタレ富山で活躍。サガン鳥栖時代に飯尾氏と5年間共にプレーした盟友。

株式会社メーカーズ（K-Cafe）



1980年4月10日生、東京都出身。読売日本SC（現・東京ヴェルディ）育成出身。1つ上の「黄金世代（小野伸二、高原直泰、遠藤保仁ら）」の日本代表に飛び級選出されるも、ベガルタ仙台時代に21歳で戦力外通告。地域リーグのどん底から這い上がり、サガン鳥栖で主将を務めた「魂の闘将」。引退後は10年間のメンタルサロン運営や解説を経て、2026年より株式会社メーカーズに参画。

サガン鳥栖で5年間、共に戦った
衛藤裕と飯尾和也。かつて同じピッチで戦った2人が、時を経て再び向き合った。今回のテーマは、飯尾和也という一人のサッカー選手が歩んできた道と、その先にある未来だ。

華々しい代表歴から一転、21歳で戦力外。地域リーグ、大怪我、所属先を失う経験。それでも何度も這い上がり、16年間プロとして戦い抜いた。

そして今、46歳になった彼は福岡で、もう一度新しい挑戦を始めている。

「絶望の淵に立たされた時、俺のサッカー人生は本当のスタートを切った。」

衛藤 飯尾さんとは鳥栖で5年間一緒にプレーしましたが、まさか今こういう形で対談するとは思って

ませんでした。

飯尾 部屋も横だったし、オフも一緒に毎日一緒にいたもんね。試合の2日前は必ず温泉に行って、体を整えながらお互い愚痴を言って（笑）。

衛藤 僕が知っているのは鳥栖時代からですけど、飯尾さんは中学1年から、当時カズさんやラモスさん、武田修宏さん、北澤豪さんたちが在籍していたヴェルディに入りましたね。

飯尾 ちょうど中学1年になる時にJリーグが開幕したんですよ。ヴェルディが一番盛り上がりつつあった頃で、競争率もすごかったと思う。小学生の頃はFWだったけど、周りにうまい選手がたくさんいるから、中盤、ボランチ、センターバックってだんだん後ろに下がっていった（笑）。

その中でU・15、U・16日本代表にも呼ばれるようになった。

衛藤 小野伸二さん、高原直泰さん、稲本潤一さん、小笠原満男さん、遠藤保仁さんら黄金世代の1学年下でありながら、その世代の代表にも呼ばれていた。それだけ順調だった飯尾さんが、初めてサッカーを辞めたと思ったのがトップ昇格後だったんですね。

飯尾 あの1年だけは本当にサッカーが嫌いになったね。「お前、下手くそだな」「それでもナショナルチームか」って言われて。それまでうまくいきすぎていたところもあったから、初めて否定されて、本気で辞めたいと思った。

衛藤 その後、ベガルタ仙台では主力としてJ1昇格にも貢献した。で

16年間のプロ人生を支えたのは、勝利への執念と仲間を鼓舞し続ける熱い魂だった。





今度は、福岡の未来を育てる。

年齢や立場を越えて集まった仲間たち。一つの志が、新しいチームをつくり上げている。

も3年目に怪我をして、21歳で初めて戦力外になる。

飯尾 60試合くらい出ていたし、「来年巻き返してやるう」くらいに思ってたんよ。でもクビになった。トライアウトを受けても引っかかりなくて、沖縄かりゆしFCに行った。

衛藤 そこで今度は前十字靭帯を断裂したと。

飯尾 しかもリハビリしている時にチームがなくなるって連絡が来た。その後、静岡FCに行ったけど昇格できなくて、また次がなくなった。

衛藤 日本代表にも呼ばれていた飯尾さんが、サッカーを続ける場所すらなくなりかけたわけですね。

飯尾 でも、その経験が後になって全部生きるんよ。あそこまで落ちたから、「もう絶対にあなりたくない。じゃあどうするんだ」って、本気で考えるようになった。

「運じゃない。準備をやり続けた奴だけが、奇跡を引き寄せる。」

衛藤 そこからサガン鳥栖に入って、地域リーグから再びJリーグの舞台に戻ってくる。飯尾さんの中では鳥栖に来た時点で覚悟が決まっていたんですか？

飯尾 決めてたね。試合に出ている

時だけ頑張るんじゃない。試合に出ていない時も、怪我している時も、練習試合でも普段の練習でも、そこで頑張ってるって全力だって。それだけは絶対にやり切ろうって決めてた。

衛藤 僕も一緒にやっていましたけど、キャプテンを務めていた時もそうだし、試合に出られなくなってからも、練習への姿勢は変わらなかった。特にユン・ジョンファン監督になってからは、前年まで主力だったのに出場機会が一気に減りましたよね。

飯尾 ヴェルディの時はフラッシュバックしたよ(笑)。前の年までキャプテンで試合にも出ていたのに、監督が代わったらメンバー外にもなるクビになった経験がなかったら、あそこは乗り越えられてないと思う。

衛藤 普通なら「なぜ自分を使わなんだ」と監督に向かいそうです。

飯尾 矢印は常に自分に向けていたから、「自分が良ければ出られるじゃないか」ってずっとそこに持っていた。出られなくても態度を変えない。最後まで戦う。それだけは絶対に貫こうと思ってたね。

衛藤 その姿勢は松本山雅でも同じでしたよね。5試合しか出場できなかったシーズンがあっても契約が続いて、最後はJ1昇格を経験して引退した。

飯尾 結局そこも全部つながっていくんよ。「クビだな」と思っても、ずっとやり続けていたら反町さんがもう1年残してくれた。そして3年目に昇格できた。運が良かっただけじゃない。やり続けることで、自分で引き寄せてきた部分は絶対にあると思う。

衛藤 センターバックとして特別大きいわけでも、ものすごく速いわけでもなかった。それでもプロで生き残った。何を武器にしましたか？

飯尾 一番大事にしていたのは、人を動かすこと。周りを動かして、チームで守る。相手エースと10回勝負したら負ける。でも周りを声で動かして勝負の回数を2回に減らせば勝てる。だから、特にディフェンダーの子には「喋れる選手」になってほしいね。

今度は福岡で「地域の体温を上げる。」

衛藤 引退後は松本でメンタルサロン「コラソン」を約10年間続けました。なぜメンタルだったんですか？

飯尾 俺自身がメンタルで人生が変わったから。この経験を自分の中だけにしまっておくのはもったいないなって。サッカー少年年代じゃなくて、仕事をしている人にも絶対に役に立つと思った。講演やカウンセリングをやって、その後は「体が健康



伝えているのはサッカーの技術だけではない。人生を切り拓くための考え方。一つひとつの出会いが、未来へのきっかけになる。笑顔の輪は、次の挑戦へとつながっていく。

SPECIAL TALK

バモス・スペシャルトーク

「じゃなきゃ心も整わない」って思っ
てジムも始めた。

衛藤 そして今度は福岡への移住を決めて、株式会社メーカーズに入っ
たんですね。

飯尾 メーカーズの人たちと会った時に、選手時代から引退後まで俺がやってきたことと全部一致した感覚があったんよ。人のためにやって、人を笑顔にする。それを企業の中でやるだけなんだから。

衛藤 その一つがメーカーズFCですね。

飯尾 俺は今までも、ボールを蹴ったことがない人にサッカーを教える「ボールエクササイズ」をやったけど、目的はサッカーがうまくなることだけじゃないんよ。体を動かしながら、前向きなマインドを作る「いいプレーをしただけ褒めること。最初にみんなへ伝えたのが、

と」と『できる、やれる』という
気持ちだけは絶対に持つこと。」

衛藤 実際に、サッカー経験のない
社員の方も参加しているとか。

飯尾 それってすごくいいことなん
よ。みんなポジティブな空気を自分たちで作っていけば、人は成長する。それが仕事にも絶対に活きる。もちろん採用とカリキュルトとか会社としていろんな課題はある。でも結局、人だから。人が人を連れてくる。そこに熱があれば人は集まってくるって思う。

衛藤 最後に、福岡のジュニアサッカーファミリーへ。これから飯尾さんは、この地域で何をしていきたいですか？

飯尾 学生たちのことも、子どもたちが笑顔で過ごせる環境づくりも、全部本気でやっていきたいと思っています。一人ではできなかったこと

も、メーカーズの人たちと一緒に、きつと形にできる。いや、形にするどころか、想像以上に面白いことまでできる気がしています！やっぱり、自分のすぐそばにいる人たちを楽しませることが大事。地域の皆さんに「ここに住んでいてよかった」「この街、なんか元氣だな」と思ってもらえるように、地域の体温を少しずつ、でも確実に上げていきたいです。これからはMAKERS FCも、車の販売も、地域づくりも、できることは何でもやります。車のことだけじゃありません。もしかしたら、皆さんの元氣まで満タンにしてしまおうかもしれません(笑)。そんな気持ちで、これからは全力で走り続けます！皆さん、ぜひ僕に会いにケイカフェへ遊びに来てください。車を見に来たはずなのに、気づいたら話し込んでいる——そんな場所にできたら最高です。皆さんにお会いできるのを楽しみにしています！



競技レベルを問わず、誰もが本気でサッカーを楽しめる場所。それがメーカーズFCの目指す姿だ。